



■台風18号などによる大雨災害義援金を茨城県常総市に贈ります

昨年9月の台風18号及びその後の低気圧がもたらした記録的な大雨により、関東・東北地方などの広い範囲で甚大な被害が発生しました。運動本部では、被災された方々や地域を支援するため、11月30日まで義援金を受け付けたところ、総額178,878円が寄せられ、1月中旬に被害を受けた茨城県常総市に贈ります。ご協力ありがとうございました。

■義援金協力者御芳名(敬称略)

栃木県宇都宮支部、大分県杵築市支部、京葉ガス「小さな親切」の会、鈴木恒夫、堀江正浩、山橋由貴子

■第40回作文コンクール・第31回はがきキャンペーン入賞作品集予約受付中!

作文コンクールとはがきキャンペーンの入賞作品を集めた作品集を

2月中旬に発行します。書店での取り扱いはありませんので、ご希望の方は運動本部までご連絡ください。

タイトル 未定

価格 400円(税込・送料別)

※会員価格 ご購入数が10冊以上の場合は、15%割引をいたします

収録作品 ●作文コンクール上位作品

30編(大臣賞2編・運動本部賞2編・特別優秀賞6編・優秀賞20編)

※入選100名は氏名発表のみ、作品の掲載はありません

●はがきキャンペーン入賞・入選全24作品

■作文コンクール入賞・入選全130編をホームページに掲載中!

12月7日(月)より、作文コンクールの入賞・入選作品をホームページに順次掲載しております。ぜひご覧ください。

URL <http://www.kindness.jp/>

■原稿募集中!

「HIROBA」は読者のコーナーです。身近な親切さんの話題などをお寄せください。採用された方には運動本部オリジナルグッズを差し上げます。

送り先 〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-20-4 公益社団法人

すずらん訪問は小国の宝物

岩手県久慈市立小国小学校 6年 下國力貴



昨年、小国小学校は「小さな親切」実行章をいただきました。ぼくたちの学校が、老人ホームのお年寄りや病气やけがで入院している患者さんたちに学校近くの山に咲く「すずらん」にメッセージを付けておくなどの活動を5年間続けているという新聞記事を見た方が、推せんをしてくださったと聞きました。

この活動は、昭和39年にオルガンや石けんをプレゼントしてくださった東京の親切な方に感謝の気持ちを込めて、すずらんをおくって交流したのがきっかけで、翌年には中学校の生徒会が中心となってすずらんを病院における訪問活動を行ったのが「すずらん訪問」のはじまりと聞いています。

ぼくは、今年「小国の代表」として訪問活動をしたので、実行章も「小国の代表」としていただきました。50年間もの間続けられてきたすずらん訪問に参加した一人として、そして後輩ハバトンをわたしていく一人として、とてもほこらしく思っています。

すずらん訪問で届けるすずらは、ぼくたちのほか、地域の方々が総出で早朝からとってくださっており、地域の方々の協力でできているのです。

訪問当日は、「小国の代表」ということを自覚して、これまでとはちがう気持ちでのぞみました。ぼくは、たくさんの人に幸せを届けようと思ったりしました。特別養護老人ホームさんたらす久慈では、去年お話をしたおばあさんと再会することができました。おばあさんは、僕の手をにぎってなみだを流して喜んでくれました。県立久慈病院では、毎年詩をプレゼントしてくださるおじいさんと再会することができました。今年も素敵な詩を書いたカードをいただきました。看護師さんから「朝からがんばって書いていたんですよ」とお聞きして、こんなにも楽しみにしてくださっていることを知り、とてもうれしくなりました。

ぼくは、すずらん訪問を6年間続



けてこれらに本当によかったと思います。それは、地域の方々の思いを知ることができたし、「感謝・いたわり・奉仕」の心を学ぶことができたからです。また、人を大切にするところが少しずつできるようになってきたことも、すずらん訪問の経験が生きているのではないかと思います。

ぼくは、たくさんの人々に幸せや元気を届ける小国のすずらん訪問が、これからもずっとずっと続いていくことを願っています。そして、小国の宝物と言えるすずらん訪問を、これからも応援していきたいと思

第3回発表!

作文コンクール第40回記念企画「おとなの作文」

言葉がけの効果

埼玉県 篠原和人

「行ってらっしゃい」「お帰りなさい」これは家庭内の話ではない。某駅の立ち食いそば屋さんで働く私の知人の話である。

彼女が、1昨年勤める際に教えられた店内でのあいさつ——「いらっしゃいませ」「またお越しください」に加え、いつの日やら先の言葉を使いだしたそうだ。要因はこれだけではないだろうが、朝に夕にこの言葉を繰り返しているうちに、サラリーマンや学生さんの中にわずかずつ常連客の方々が増えてきたとのことである。

先日、きっかけについて、彼女に直接伺ってみた。「早朝から、会社や学校に向かうサラリーマンの方や学生さんのまだ眠そうなお姿や、一日を終え疲れを抱えて立ち寄る表情を見れば、ごく自然に出てきてしまいます。」

さりげなくこう答えてくれた。お客様は、きつとあのひと言で心を癒され、家庭的な雰囲気を感じ取ったのかもしれない。彼女のこやか

な顔つきとともに、お客さんを思いやる気持ちが伝わっているのに相違ない。

より身近なところで、こんなこともあった。私の義父は満90歳になった。高齢のせいもあって、定期的に二ヶ所の病院へ通院している。各々の病院とも院長先生が担当だが、患者の対応はかなり異なる。義父が腸の働きをはじめ、体力が衰えてきて困っている旨などの話をしだすと、A氏は「年を取って元気になる人はいないから」とあつさり返す。

B氏は、その際、必ず患者の前に自分の椅子を向け直し、じっくり話を聞こうとする。A氏も決して不親切ではないのだが、言葉がけが十分とは言えない。

「話を聞いていただけただけでも、気分がよくなるのです。」B氏に伝えられた義父の言葉が、今なお耳に残っている。

親切とは、相手の気持ちをくみ、その人のために何かを為す、ことで

あるが、「言うは易く、行うは難し」は確かである。しかしながら、力まず、飾らず、わずかな思いやる気持ちを持って、自然に振る舞おうとするならば、さほど難しい行為ではないさそうだ。

私は思いやりのひと言——相手の心に伝わる言葉がけは、多くの人にとって、あまり勇気も要することなく取り組める気がしている。退職後、参加しはじめ2年目を迎えた朝のラジオ体操の話である。大半は高齢の方々が多いが、常に200名近い。たとえ悪天候であっても皆参加している。いったい何故だろうか? ラジオ体操を頑張りつつも、参加者は各々が、その前後の出会いの時間を大切にし、楽しんで

いるのだ。様々な言葉がけが行き交う。「おはよう。元気にしてる?」「昨日カラオケ行ってきたの。今度行くよ。」「前回、休んだね。心配したよ。」等々。

言葉がけは、親切への入口、かもしれない。いつか、相手の心に響く言葉がけが、互いにさらに頻繁に、そして隔々に広がっていくことを願うとともに、自らも範を示したい。